

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

- UIFA JAPON1998年度第6回総会
- 記念講演 「岐路に立つ建築」ー持続可能な社会に向かう建築の道筋ー
- UIFA第12回日本大会準備中間報告
- プログラム部会からの報告
- おもてなし部会からの報告
- 特集ザ・インタビュー ー日本建築学会会長 尾島俊雄氏ー
- 新会員の紹介 その1
- ドキュメント8 ー第12回UIFA日本大会に向けてー (1998年03月01日~1998年04月25日)
- 海外交流の会の報告と予告・UIFA'98 記者発表会

■ UIFA JAPON1998年度第6回総会 UIFA JAPON会長 中原暢子

今年も6月の第2土曜日(13日)にUIFA JAPONの第6回総会が砂防會館別館3階の会議室「立山」で開かれました。会員の皆様のご協力を頂いて、ご出席の方と委任状を頂いた方を合わせて、正会員の2分の1以上になりましたので、会則どおり無事に議案の審議に入ることが出来ました。

少し総会議案書について御説明いたしますと、第1号議案では、UIFA JAPONの1997年度の活動報告、一般会計収支報告、特別会計収支報告、会計監査報告を、第2議案では、1998年度の活動計画案、一般会計収支予算案、特別会計収支予算案のご審議を、第3号議案では、役員を選出をいたしました。各議案は各々、ご出席の方全員の賛成をいただき、原案通り議決されましたことをご報告いたします。

また今年も特別で、9月にUIFA第12回日本大会が開催されますので、松川実行委員長より、大会開催準備の進捗状況についての説明がありました。6月4日現在で29ヶ国162名の参加登録、アブストラクトの投稿21ヶ国62件、収支予算¥3,700万程度これならなんとか国際会議が開けそうだという大変明るい報告がありました。世界からの反響と期待が大きいことにも驚く一方、皆様のご参加が最大の頼りでありますので、どうかお誘い合わせの上参加登録下さいますようお願いいたします。

この後の記念講演につきましては、次の報告におゆずりするとし、お話をうかがいながらも、9月の日本大会のことばかりが気になりました。最後はなごやかな懇親会で、総会を終わりました。

日時 1998年6月13日(土) 13:30~17:30

場所 砂防會館(シェーンパッハサポー)3階会議室「立山」

出席者 総会31名 委任状53名

記念講演会42名(会員37名、非会員5名)

懇親会34名(会員31名、非会員3名)

■ 記念講演 「岐路に立つ建築」

ー持続可能な社会に向かう建築の道筋ー

建築家で、滋賀県立大学環境科学部環境計画学科の教授をしていらっしゃる林昭男先生をお迎えて講演をうかがいました。今回の講演は、UIFA日本大会まであと2ヶ月と少しという大切な時期に、大会テーマである「環境共生時代の人・建築・都市」について、広く私たちの知識を深め、共通の認識を持ち、また共に意識を高めていこうという意図で、総会の後に実行されました。

①岐路に立つ建築

(Architecture at the crossroads for a Sustainable future)

1996年6月、建築家の世界大会がシカゴで開かれ、その時のテーマが「岐路に立つ建築」、持続可能な未来をデザインすることだった。この時の中心人物はスーザン・マクスマンという女性建築家で、大変熱心に会議は進められた。

②サステナブルデザインとは

環境倫理に根ざしたデザイン思想で、環境への負荷をつとめて少なくすることで、そのため循環系サイクル、自然エネルギーの活用、過度の成長の抑止などに配慮するものである。

③サステナブルデザインの事例：見えてきたいくつかの道筋

(1)屋久島モデル、(2)世田谷区・深沢環境共生住宅、(3)アースポート(東京ガス、港北ニュータウンビル)

④スライドによるサステナブルデザインの実例の説明

(吉田洋子)



総会会場



林昭男先生

■UIFA第12回日本大会参加登録中間報告

9月に開催されるUIFA日本大会への参加登録は、予想以上に多数の申し込みがあり、実行委員一同嬉しい悲鳴をあげています。この、たくさんの国々からやって来る友人たちとの友情を深め、真剣に議論し、より良い成果を生み出したいものです。



1998年6月25日現在の参加国 () 中は参加人数

地図番号	1. 英国 (アブストラクトのみ)	13. スロベニア (2)	25. インド (1)
	2. デンマーク (2)	14. クロアチア (2)	26. 中国 (4)
	3. ベルギー (6)	15. ブルガリア (4)	27. 韓国 (3)
	4. フランス (7)	16. ルーマニア (5)	28. 日本 (117)
	5. スイス (3)	17. トルコ (アブストラクトのみ)	29. マレーシア (1)
	6. オーストリア (1)	18. イスラエル (1)	30. オーストラリア (2)
	7. ドイツ (10)	19. イラク (1)	31. カナダ (1)
	8. ハンガリー (2)	20. チュニジア (1)	32. 米国 (8)
	9. ポーランド (3)	21. コートジボアール (1)	33. アルゼンチン (アブストラクトのみ)
	10. ラトビア (2)	22. ナイジェリア (アブストラクトのみ)	34. ブラジル (2)
	11. フィンランド (1)	23. ロシア (2)	
	12. スウェーデン (1)	24. カザフスタン (1)	

6月25日現在のアブストラクト投稿件数は、72件(うち日本から35件)で、国数は22カ国です。韓国、米国から4件、アルゼンチン、ルーマニア、ドイツ、中国からそれぞれ3件、オーストラリア、ポーランドからそれぞれ2件応募されています。アブストラクトの内訳は、A. 人と環境13件、B. 建築と環境32件、C. 都市と環境23件、D. その他4件です。

分野別に見ると「人と環境」関連が少ないとはいえ、バランスよく集まっています。それぞれの発表のテーマを、大まかに分類してみました。

- ・ライフステージと環境に関連するもの
- ・バリアフリー環境、福祉のまちづくりに関連するもの
- ・建築の地域性に関連するもの
- ・自然環境との共生に配慮した設計事例
- ・建築や都市の保存、再生、再利用に関連するもの
- ・安心、安全のまちづくり関連

・都市の中の小スペースや、道路などの環境共生的提案
 ・まちづくりの事例
 ・女性の建築家のこの分野における役割についてのもの 等等
 いかにもその国ならではの内容や、発表の仕方を工夫したものが含まれていて、様々な視点から環境と共生を捉えることができそうです。

また、展示登録件数は、6月25日現在パネル44件、模型5件です。国別にみると、日本35件(内模型4)、ドイツ、中国が3件。スロベニア、ブラジルが2件、韓国2件(内模型1)、ベルギー、ハンガリー、イスラエル、ラトビア、クロアチア、米国からそれぞれ1件です。

この世界中からの反響を励みに、あと2ヶ月を乗りきりましょう。私たちの会議から、明日の地球は見えて来ませんか?……皆さんご参加ください!

(田中厚子)

■プログラム部会からの報告

発表：5月末がアブストラクトの応募締切だった。6月9日の集計で応募アブストラクト数は67編。集計後もまだボツボツと応募があり、最終的には80編くらいになりそうである。予想の倍近い。

一方、大会のスケジュールの中での論文発表の時間は合計9時間半、570分である。時間の枠の中で、可能なかぎり多数の方に発表していただくにはどうすれば良いか。今、プログラム部会の担当メンバーが検討中の、大きな頭の痛い問題である。

論文発表は、いわば大会のメインの出し物である。大会本番、トラブルなくスムーズに論文発表が進行していくように、他部会の方達とも一緒に努力をしたい。その為の前作業をぬかりなく、今行っておくのも、私たちの役目である。

世田谷・墨田スタディツァ：世田谷は、深沢環境共生住宅と次大夫堀公園を見学し、いらか道を歩く計画である。墨田は、長谷川逸子さん設計の生涯学習センターを見学し、京島地区を歩く計画である。いずれの見学先も約160名の見学者が同時に訊ねる事は無理なので、見学者を8つのグループに分け、まるでパズルを解くように、移動のスケジュールを作っている。各グループには、グループリーダーとサブリーダーの2名のリーダー役の人をつける予定で、皆様にリーダー役をかって出て下さる方を期待している。

展示：応募予約点数は、6月25日現在でパネル44件、模型5点。予想を大きく越えている。現在展示担当メンバーが、展示会場、新宿パークタワーギャラリー・2での展示のレイアウトを検討中である。展示会パーティは世田谷スタディツァの後に行われる。パーティには、スタディツァに協力して下さった、世田谷区の女性の建築系職員の方々にも参加していただく予定である。

オープニングパーティー：世界の色々な国からやってきた女性建築家達が知り合いになる為の、ハンガリー大会以来2年振りの再会を喜びあう人々の為の、パーティーである。明るい、フランクな雰囲気のパティーになることを願って、計画中である。UIFA JAPON 会員による日本舞踊を、アトラクションとして予定している。

プログラム・資料集の編集：プログラムについては掲載する内容は決まったものの、現在は論文発表の編成が最大の課題である。応募総数が予定を大幅に上回ったため、場合によっては会場を2ヶ所以上に分けなければならないことも考えられる。その場合プログラムの上での表現、会場、通訳の問題など検討項目は多い。

資料集には世田谷、墨田、横浜のスタディツァ、東京湾クルーズ、及びA・Bコースのエクスカージョンの見学資料が載せられる。編成はほぼ終わり、6月末までの予定で文章の作成に各担当者が当たっている。その後翻訳→清書→印刷の予定である。

(山田規矩子、東由美子)

■おもてなし部会からの報告

“おもてなし部会”とは、よくぞ各づけたものだと思うが、第12回日本大会も秒読み段階になり、是非皆様にもてなしの心とその意味について、考えていただきたいと思います。この大会を陰で支え、成功に導く鍵を握っているのは、おもてなし部会員ばかりでなく、UIFA JAPON会員一人一人の心からの接し方、つまり心構えが、いかに世界の友人に与える日本の印象を左右するするかということを理解しなければなりません。世間では、人に対して、自分の望む結果が得られるようにしむけることばかりを考え、もてなすの意味を少しはきちかえ、接待する事に疑惑の念をもたれる風潮があるのはとても残念なことです。もてなす、つまり「持て成す」には、様々な意味があります。意図的に、ある態度をとったり見せ掛けの態度をとるとか、対応してとりさばくとか…。しかし、大切に扱い大事にし、歓待することこそがその極意に尽きます。深い教養や性格から醸し出される心からの歓迎態度で、私たちは皆に接したいと思っています。お招きした世界各国の一人一人に日本の会員は、是非もてなしの意味をよく理解してから、会議に、スタディツァーに、ポストコンGRESSにと接して欲しいと願わずにはられません。

前置きが長くなりましたが、先般より、おもてなし部会から、別に横浜部会が発足し役割が細分化された事は、大会内容の充実のためにとてもタイムリーな良い方法でした。そして、お互いに情報交換しながら大会中は助け合う体制を組んでいます。

大会前日や期間中の対応、ホームステイ希望者を何時、何処で、どのように受け入れ引き渡すかの問題や、受入れ側の相性や、喫煙者か否か、ベットの有無なども考慮するためのアンケートも作成し、こまやかに対応するための準備もしつつあります。歓迎パーティでは各参加国の歌や曲のバイオリン生演奏をBGMとして流す準備をし、乾杯の日本産ワインの試飲も済ませました。フェアウェルパーティの会長による茶会協力者を募ったり、エクスカージョンAコースでは、国立能楽堂や第二国立劇場、女性の建築家作品として林雅子氏のStep見学交渉をすでに終え、食事にはスキヤキかてんぶらかなど予算に合わせたメニュー決定段階です。Bコースでも同様、鎌倉八幡宮へのアプローチは海側から鳥居を潜って至り、昼食は日本の美味な小さな会席弁当になど子細を計画中。ポストコンGRESSも同様、見学会や旅行社との交渉を重ねたり、神戸の日高、武野両会員と連絡をとり、小林氏のレクチャー関係、安藤忠雄事務所の交渉、淡路島や、酒心館の夜会計画を綿密に準備中です。

大会の記念品風呂敷の中に入れる包み方の説明書きの和紙やコンGRESSバックは、デザイン部会の協力で作成中ですし、格安な美濃部商店の協力体制下で、版下が出来次第発注すべくスタンバイしている状況です。おもてなし部会全員は、日本の心をどのように伝え、ありのままの現実と、人、街づくりと環境を通した建築を、自然な振る舞いのなかで理解し又楽しんでいただくために努力しています。そして、何事も事を成し遂げるには、相互協力と感謝の気持ちもちながら事を選び、その感謝の心が、すべてもてなしの心に通じるのではないかと思います。私たちは、早や大会当日に向けエンジンの回転数が上昇、既にスパートがかかっています。(正宗量子)

特集ザ・インタビュー —日本建築学会会長 尾島俊雄氏—

UIFA第12回日本大会を支援して下さる方々にお話を伺うこのシリーズ、第5回目は日本建築学会会長の尾島俊雄氏です。学会の会議前のお忙しい時間を割いて、東京会館喫茶室でインタビューさせていただきました。インタビュアーは実行委員長の松川淳子と広報理事の渡辺喜代美です。広報の田中が記録係として同席しました。



松川：まずはUIFA世界大会への建築学会のサポートをありがとうございます。6月中旬の時点で参加者 180人を超えました。遠い国からの参加者も多く、発表論文は60を超えています。とりあえず好調で、これもご支援のお陰と感謝しております。また学会の中にも「環境と女性委員会」を設置していただきました。はじめに建築学会の環境共生に対する取り組みの現状をお聞かせください。

尾島：日本建築学会は 112年前に造家学会として発足しました。家とは何かを考える前に、そこに住む人間を主体に研究する文化的理念があった。それが建築学会と名称変更して学術・技術・芸術を統合する建築学会となって、昨年 100周年を迎えて、創立時の造家学会の理念に立ち戻りたいと考えました。人が主体で、自然と共にあるはずの建築が、この50年、完全に近代建築産業の主体者になってしまいました。学会は本当に人間のためにやってきたのかと、もう一度その存在の意義と共に、行動規範と倫理綱領を作っています。それから、グローバル・スタンダードの問題があります。プロフェッショナル・ライアビリティが問われている時に、果たして日本の建築家は国際的なレベルにあるのか、建築教育は今のままでよいのか。今日の日本の都市では安心して住み続けられる感じがしません。ある豊かさをもったのは事実ですが、本当に市民は都市環境に満足しているのでしょうか。45代目の会長として、根本的に考え直さなければいけないと思っています。その第一歩として、阪神大震災の教訓から安全と安心について建築基準法の改正に対する要望、第二に地球環境COP3に対して百年耐用の建築とCO₂の30%削減の提言、第三に国際的な資格制度の認定に取り組んでいます。少なくとも教育訓練については学会が責任をもって、UIAの基準である5年以上の大学教育をし、グローバル・スタンダードに見合った責任感をもった建築家を育てるべく検討しています。学会は地球市民のための学会として、支部支所毎に自由会員を募り、会員と市民との話し合いをもとに問題提起していく方法を取り始めました。そのきっかけになったのが、UIFA'98（国際女性建築家会議）なのです。特命副会長として平山先生が担当されています。

渡辺：先日都庁での「21世紀のエネルギーと環境」というシンポジウムのパネリストをされていた尾島会長が、「建築学会は変身します」とアピールなさって、会場が沸いていました。保守的な学会と

いうイメージをもっておりましたので、あのように心を開いてお話になったところが印象的でした。

尾島：建築学会は本来職能団体ではなく、文化を担う役目を中心であると思います。しかし、気がついたら特殊なグループの集まりみたいになってしまっている。僕等が学生の頃は建築雑誌が本屋の店頭の一冊目に付く所に並んでいましたが、今はパソコン雑誌の下に隠れてしまっている。

松川：一般の市民にとっては、住宅不足の時代を生きぬき、今は量が満たされて、空間の質に関心がなくなったように見えますね。

尾島：僕は本当に関心がなくなったとは思いません。ごまかされてしまったのではないのでしょうか。衣食足りて住足りずというか、住環境は全くひどいものですよ。

松川：住宅政策そのものが量を満たすことを優先させてきましたから、一世帯一住宅が達成されたときに豊かな空間が必要だといえなかった。それは建築学会を代表の一つとする専門家集団の怠慢という気もしますが。

尾島：そうですね。ターゲットがどこにあるかを言わなかったのですから。

渡辺：量から質への転換の時期に十分な議論をしてこなかったように思います。

尾島：学会は大学と共に行政の下請けをしてしまったのです。本来はボランティアで、あるべき理念を追求するはずの学会が、行政の委託で税金を使って研究するというような状態になってしまった。行政はシビル・ミニマムですから、現実には最低限の事でボトムアップでプッシュしかできません。学会は文化、つまり多様な価値観や生きる喜びといったものを与えるブルの役割をしなければならない。そこに問題があったと思います。学会と行政が一緒になって復興した時代は終わったと思います。もう、それぞれの役割をもって良いのではないのでしょうか。今度の基準法改正でも、行政のものとは違うアカデミック・スタンダードをつくらうと言っています。ミニマム・スタンダードがすべてだといってしまうと、建築界が一律に規格化してしまう。

松川：UIFAは行政、研究・教育機関、フリーの建築家など様々な働き方のメンバーがいて、大会では仕事の中で感じた問題点や疑問点を発表しています。トータルなプロジェクトの中から出た問題点を突き詰めていくと、今後の提案などが出てきます。細かな学問的成果にそのまま繋がることは難しいとしても、視点を現場においているところがUIFAの一番良いところだと思っています。

尾島：まさにそれが原点ですね。今改めて原点を言わなければならないほど、市民と学会が離れてしまっている。

松川：細分化して積み上げた結果が現実はどう反映するかが見えにくくなっているのが、今の問題ですね。だからこそプリミティブなことをやらなければならないと思うのです。

尾島：巨大化した都市や完成した産業界に生まれてきた空洞化現象。戦災復興、産業育成、職場確保、我々は食べていかなければならないから、企業が必要で、企業のために行政が必要で、その効率化の

ために一律な基準を創り、産業界に寄与した。そこに生活者の視点はなかったのです。女性は潜在的能力があるにもかかわらず、企業中心の男社会の中で、内面的なささえの役割しかできず、今日のような男社会ができてしまった。

渡辺：必要な最低の基準さえもが男性社会の産業構成によってつくられてしまったのですね。道筋を間違えた可能性もありますね。

尾島：20年前にシフトすべきでしたね。

松川：遅すぎたきらいはありますが、だからと言って放棄して良いのかどうか。女性の方にも責任がありまして、社会的に責任のある立場を引き受けることを避ける傾向があると思います。

尾島：グローバル・スタンダードからは遠いですが。その意味でもUIFA大会を開催するのは良いことです。学会も教育訓練から見直しをしようとしています。学会が率先してボランティア活動に対するある種のステイタスを定着させるようにしませんと。

松川：20年取り戻せるかというのは大変な課題ですが、取り組まざるを得ないと私も思います。今、廃棄物もふくめて保存や再利用のことを勉強しているのですが、今まではその対象としてお寺とか文化財しか考えてこなかったのが良く分かります。住宅や駅や工場など昭和初期の建物で生活に関わるものが、まだ東京にも残っていますけれど、あと20年もしないうちに全部なくなってしまうでしょう。日本は自分達の町を大事にしない国だと気がします。

尾島：さっき造家学会の理念は人だという話をしましたが、保存の前にそこに住む人達の訓練ができていくかどうか。使い続ける人の生態連鎖ができていくか、住み続ける家族がいるのか、こうした社会的ベースがあるかという問題があります。今は家族も家も使い捨てです。家族と共に家も存続させなければならない。家より先に人間の問題が多いと思いますね。誰でも生活が守れるのであれば、本来は先祖が使っていた何やかやが欲しいですよ。自分のルーツは欲しいではありませんか。ところが今の税制では、情け容赦なく根こそぎ持って行かれて全てが消されてしまう。戦うべきは税制かもしれません。

松川：人を大事にするということを、逆手にとって悪用するきらいがありますね。例えば地震に弱いといわれれば、団地の建替えに応じてしまいます。行政が住民の当然の願いをリードしてしまうきらいがあります。

尾島：それは産業界が行政を動かしているからです。本来は学会が産業界をリードすべきなのです。プリミティブなものが先にあるという、原点に戻らなければいけませんね。UIFAのように現場から積み上げた意見が必要です。それに住民が共鳴し、住民が発言権をもって、行政に働きかけるとするのが理想です。学会は修辭学的研究者の集まりではなく、プリミティブな現場の声を本流とする方向にすべきと思います。だから僕はUIFAの世界大会支援の申し出は嬉しかったのです。学会創立時の意志ですからね。UIFAの活動の場を学会内部に創ってください。松川さんに学会理事をお願いしたのも創立時の意志に沿ったものですから。

渡辺：論文発表をしないと学会に入っている意味がないような気が

して、私は大分前にやめてしまったのですが、今日の尾島先生のお話を伺って、また入ろうという気持ちになりました。離れて学会を見ると、役所のように年功序列のようで、若い人や女性に道が開かれていないという印象があるのですが。

尾島：今、潜在的能力は女性にしかありません。男性は疲弊しきっていますからね。学会も女性のパワーを頼みにするしかない。(笑)

渡辺：女性は数では半分としても社会的にはマイノリティーという複雑な立場ですが、生活者の視点を通して、建築や都市に対する豊かなチャンネルを持っているところが強みになるかも知れません。

尾島：パリ、ニューヨーク、あるいはイタリアなどは町並みに密度がありますね。あの景観は男社会の産業だけでは造れない。多様な民族、多様な性が必要です。文化は男だけではできませんからね。また、一人が造った都市は単調ですよ。それに対し、ヨーロッパや中国の都市は奥行きがあります。歴史と生活がつながっていて、家具や器一つにしても重みがあって立ち止まって動けなくなることがあります。今の日本は走ってばかりですから。立ち止まって見ると、なんだこの浅い、奥行きのない町だと思いますよね。その点日本の女性はずっと男社会が造るものを立ち止まって見て、「他に大事なものがあるのに」と思っていたのではないのでしょうか。それをいうと奥ゆかしくないといわれるから言えなかったのではないかな。でも外からみたら、なんだあの国は、あの町はといわれてしまうでしょう。

渡辺：京都の町並みの中に建った新しい建築を見にいった時のことです。路地で私が道を訪ねたおばあさんが、その建物を指して、「なんであんな物をつくられたのはったのやろね。」と呟いたのです。なにか目から鱗が落ちるような気がしたのですけれど、物を造る時には町の奥行きを理解していないとそういう批判に繋がりますね。

尾島：そのおばあさん達は立ち止まって生活して良く見ているからアメニティーを熟知している。そこに愛なものがあったら我慢らないのしょうね。おばあさん達が本来の意味でのタウン・アーキテクトなんです。

松川：UIFAにメッセージをいただきたいのですが。

尾島：今、学会も反省の時代です。過去を棄てるわけではありませんし、先輩達のなされたことは十分誇りに思っていますが、今、思いきった改革が必要です。先輩達の築いた土台の上に立って、渋柿を甘柿にするには思い切った接ぎ木をする。その接ぎ木をUIFAに期待しています。

松川：素晴らしいメッセージをいただきました。今日はお忙しいところお時間をとっていただきまして、どうも有り難うございました。

(記録担当：田中厚子)

尾島俊雄：日本建築学会会長 早稲田大学教授

松川淳子：UIFA第12回日本大会実行委員長 生活構造研究所所長

渡辺喜代美：東京都住宅局開発調整部都民住宅課

■新会員の紹介 その1

日本大会を前にUIFA JAPONに多くの新会員を迎えました。新会員のプロフィールを2回に分けてご紹介します。(原稿到着順)

山家京子(やまがきょうこ)

神奈川県工学部建築科に専任講師として着任し1年が経ちました。建築の仕事をしていると周りは男の方ばかりという状況には慣れているはずですが、それでも最初に男性しかいない教授会に出席したときには少しびっくり。専門分野は建築・都市計画学で、現在はコンピュータや移動体通信により社会、都市、建築がどのように変わっていくのだろうかというようなことを考えています。私自身、パソコン通信と携帯電話で少しでも仕事の進め方が変わってきたかなと感じています。



山本佳代子

専門は地理情報システム(GIS)を利用した計画評価で、昨年度末まで東京工業大学の原科教授の研究室に所属していました。UIFA JAPONへの入会のきっかけは、「建設通信」の記事をみて、建築等の分野の女性研究者のみでつくる学会であることを知り、自分も参加したいと思ったことです。



本年度4月に琵琶湖研究所に研究員として就職したばかりで、まだまだ研究者としては未熟です。そのため、周りの先輩研究者の方々の長所を見習い、自分自身の研究を発展させてゆきたいと思えます。今後も、GISを利用した計画評価を中心に研究を進めたいと思えます。

(琵琶湖研究所 研究員)

横澤久美子

今年3月日本女子大学家政学部住居学科を卒業して、現在東京理科大学大学院修士課程1年に在学しております。UIFA JAPONには、日本女子大学在学中にお世話になりました、定行まり子先生の紹介で入会いたしました。今年の日本大会で、卒業論文を発表する予定です。内容的にはまだまだ不十分なものですが、いろいろな刺激を受ける良い機会ですし、良い勉強になればと思っております。



(東京理科大学大学院工学研究建築学専攻志水研究室)

吉村康子

大学卒業後3年程、病院設計を主とした事務所に勤務。その後、夫の留学に同行し渡英。ロンドンの築百年のレンガ造りのフラットで、4年間生活しました。帰国後も設計とは縁の無い生活を送っていましたが、自宅近くで住宅の設計をしていた友人の事務所をしばらく手伝っていました。UIFAは今回の日本大会を機に入会させて頂きました。この日本大会に参加された方々に気持ち良く過ごしていただくお手伝いが出来ればと願っております。



林屋雅江

つい先日までのあの忙しさは一体どこへ?設計打合せ、現場打合せ、短大授業、ショールーム案内、原稿、講演……東京圏を駆けずり回っていた私。それが今は、とても静かな日々です。CAD用パソコンでフリーセルを楽しむこともできます。昨秋、岡山の宿で語りあったKさんがUIFAで大忙しとのこと。「私ヒマだから、何かお手伝いさせて!」これが私のUIFA入会のきっかけです。7月中旬に350枚の試験の採点が終われば、もう少し時間が取れそう。UIFAと旅のバランスを計画中です。どうぞよろしく!



そしてお手柔らかに!

(林屋設計室)

岡村珠穂(おかむらたまほ)

1968年生まれ。東京出身。

平成5年日本大学理工学研究課吉田燦教授のもと、「頸髄損傷者の住宅温熱環境に関する研究」をテーマに2年間研究を行う。現在は昭和建設(株)一級建築士事務所勤務。注文住宅を主に、設計から現場まで現在勉強中。大学時代からボランティアを通して多くの障害者と出会い、現在も様々な活動に参加。重度障害者の住宅改造を手がけたことが、UIFAへの入会のきっかけとなりました。



会を通じて自分自身をもっと成長させていきたいと考えています。

(昭和建設(株)一級建築士事務所)

風間初美

現在、東京都財務局営繕部に所属し都立高等学校の建設に携わっています。建築技術の習得、コスト管理、住民対応、関係機関との調整などやらなければならないことが沢山あります。今までに経験した、都市計画、建築指導、福祉行政の知識を活かし、よりよい都立高等学校を造り上げていきたいと考えています。



今年、日本で開催される第12回大会に参加するためにUIFAに入会しました。多くの人々と交流できることを期待しています。

(東京都財務局営繕部建築三課)

沈垣

私は沈垣(チンエン)と申しますが、中国からの留学生です。今年是在日の3年目となります。現在、京都府立大学大学院の住環境専攻で修士1年生として勉強しています。5月に、京都府立大学の山上勝代先生の紹介で、UIFA日本大会が9月に日本で開くことが存知しました。それに参加したいという希望で、UIFA JAPONへ入会申請を提出しました。



私は中国で3年間の建築設計をした経験があるので、今後、ひとりの中国の設計者として、UIFA JAPONを通して、仕事などに関して、日本の建築者と交流できることを望んでいます。

どうぞよろしくお願ひします。(京都府立大学大学院)

宇野久実子

東京都多摩西部建築指導事務所開発指導課に勤務する宇野久実子です。専攻は都市計画でしたが、再開発などの面開発に興味があります。つねつね都庁の諸先輩のUIFAでのご活躍を耳にしていたのですが、入会の直接のきっかけは、2月のオリンピックに行ったことです。根が単純なので、自国で開催されるビッグイベントにはできるだけ参加した方が楽しいと実感し、UIFA'98 日本大会に登録することにしたのです。仕事と家庭に忙殺されていると世の中の動きに疎くなっていくばかりです。徐々に子離れして、UIFAの活動を通じて視野を広げ、仕事にフィードバックしたいと考えています。



福井綾子

小田急線の読売ランド前駅近くに住んでいる、福井建築設計研究所の福井綾子と申します。自営を始めて5年になります。主に木造住宅の設計、耐震診断、マンションの相談などに関わっています。UIFAのことは、創立以来参加している女性建築技術者の会のメンバーにうかがい、第12回大会のことで横浜方面の準備をしている、小渡さんと吉田さんに誘われて入会しました。



9月5日の市民公開シンポジウム(横浜)での交流パーティーの準備の担当をさせてもらっています。どうぞ、宜しくお願いします。

(福井建築設計研究所代表)

向井愛

北大農学部農芸化学科(有機化学)を卒業後、人生設計を大幅に変更して建築の世界へ飛び込みました。今年3月に卒業した名工大(学士編入)では、北大の大先輩である堀越哲美教授の研究室で都市環境を勉強していました。愛知県では2005年に万博の開催と中部国際空港の開港が予定されており、今後ますます環境面での関心が高まってくると考えられます。従来の破壊型ではなく、共生型の開発を見守りたいです。また、個人的にはヌー研究(Nagoya Urban Environment)を主宰し活動を始める予定です。今後とも宜しくお願いします。



(南アートパラダイス)

宮坂雅子

以前のことで、IOAの総会に、オリンピック讃歌を歌う合唱団で参加したことがあります。NHKホールでした。私たちはステージに立ち、幕が上がると座席には、世界中の人・人・人。顔の色も、髪の毛も、服の色合いもさまざまな委員方々などがお座りになっておられました。世界の人々が一堂に会する事の感動は強いものがありました。

UIFAのどの大会にも未参加で、国際的でない私ですが、日本での大会を機に再び加わらせていただきます。できる範囲で、前向きに参加させていただく所存ですので宜しくお願いいたします。

(テクトン)

芦川 弓(あしかわ・ゆみ)

専門：学生時代(東工大建築)は地域計画、現在は環境共生オフィスのエネルギーデータ分析他
入会のきっかけ：



今年の日本大会のテーマに関心があったため
現在、横浜の港北ニュータウンにある「アースポート」という環境共生オフィスの運用時のエネルギー消費について研究しています。まだ社会人2年目で知識不足の面も多々ありますが、これからもっと勉強して建築や都市・環境計画の興味の範囲を広げていきたいと思えます。9月の大会の際はよろしくお願ひします。

(東京ガス(株)首都圏部)

唐崎久子

UIFA日本大会のお手伝いを機に会員になりました。よろしくお願ひ致します。家事、子育てといった日常生活の営みがそのまま仕事に役立つとの思いから住居学科で勉強し、その後、下の子が幼稚園に入園した頃から正宗量子一級建築士事務所まで再び勉強させていただくようになりました。



時代の変化とともに変わる生活の中にも、普遍的な部分もあり、いつの時代でも、何か変わらずに大切かを見据えた住まいづくりに参加していきたいと思っております。(正宗量子一級建築士事務所)

中野晶子

1976年東京芸術大学建築学科卒業。

子供3人と彫刻家の夫をてなすけて、長く細く続けてきた仕事です。住宅が主な守備範囲。3世代、2所帯、3F、4F等、家族の多い住宅が多いのは、自分の環境とイマジネーションの範囲とが連動しているせいなのかも知れません。「斜面」に立つ家や「混構造」を得意とし、OMソーラーも勉強しています。UIFAに参加させて頂いたのは、「女性の自由な創造力」や「母性社会と父性」等、少々ジェンダーにもこだわっているからです。



(中野晶子建築設計室)

六反田千恵

特に専門というののははっきりしていませんが、あえていえば日本近代建築史でしょうか。耐震構造学の成り立ちについて修士論文を書きました。建築史の研究室を終了してから設計事務所に3年勤め、共栄短大にきてから4年がたちました。最近春日部市の都市計画マスタープラン策定委員会に入れていただいたことなどから「まちづくり」について関心を持ち始めました。UIFAには同じ共栄短大の川嶋先生のご紹介で入会させていただきました。なかなか会合に出ることができませんが、今後ともよろしくお願ひいたします。



(共栄学園短期大学住居学科講師)

■ドキュメント8 ー第12回UIFA日本大会に向けてー

(1998年03月01日～1998年04月25日)

3月22日 来日中のド・ラ・トゥール会長を囲む会。24名参加。

3月28日(2時～5時半)第14回実行委員会、カムライツ館。24名。
総務部会(3/27)大会役割分担、大会全体計画書。広報他合同部会(3/14)各種資料・印刷物作成のため、編集長他担当者人選。

4月25日 横浜市長へ市民公開シンポジウム御出講お願い送付。

4月25日(2時～5時半)第15回実行委員会、カムライツ館。29名。
総務部会(4/25)登録状況、収入見通し、広告成約状況、収支等の報告。横浜部会(3/29)MM21横浜館・ラドマクの再アブリチェク。(3/31)三溪園再アブリチェク。(4/1)市長挨拶日程調整。(4/9)第2回部会(4/12)三溪園使用願い提出。(4/13)シンポジウム交流パーティ打合せ。広報部会(4/17)会議中の記録・人員配置、プレスリリースの時期・目的、編集作業への係わり方、大会記録・報告書のまとめ方等検討。デザイン部会(4/25)ネームカード、風呂敷、横浜チラシ、コングレスバッグ等の案検討。プログラム部会(3/30)墨田区役所打合せ。(4/7)大会会場視察。(4/11)第13回部会。(4/22)NYCへ。予稿集等編集委員会(4/12)第1回会議。おもてなし部会(4/8)NYC昼食の件。(4/20)新国立劇場、(4/21)コレツィオーネ見学打合せ。

5月23日(14時～15時)第16回実行委員会、カムライツ館。22名。
総務部会(5/21)収支報告、収支予算・支出積算明細表、準備スケジュール案、大会要員計画案。横浜部会(5/7)第3回部会、スタディツアー・シンポジウムと広報・交流パーティ等検討。広報部会(5/9)部会、人員配置計画・予算計画、参加者・アルバイト等の募集等検討。登録者の増加を促す対策案作成。デザイン部会 ポスター、ネームカード、コングレスバッグ、風呂敷、横浜チラシ案等の作成。プログラム部会(5/13)世田谷コース下見。(5/17)第14回部会。予稿集等編集委員会(5/17)第2回会議。おもてなし部会(5/8)中央工学校STEP見学打合せ。(5/13・14)コングレスバッグ見本作成。(5/15)デザイン部会と打合せ。

■役員会の報告

1997年度第12回役員会(98年03月28日)役員12名出席。

1998年度第1回役員会(98年04月25日)役員11名出席。

第2回役員会(98年05月23日)役員11名出席。

■海外交流の会の報告と予告

UIFA第12回大会のテーマに関する勉強会の第2回目として、去る5月9日(土)、けんぼプラザ会議室において第15回海外交流の会が開かれた。講師はドイツの事情にもくわしい建築家の高橋元さんと、コーポラティブハウスだからこそできる環境共生住宅についてお話くださった。

まず、居住者が計画に参加することがポイントで、それによって健康に良い建材も選択でき、建った後環境共生のために工夫した装置の監理もうまくいくとのことで、居住者参加の意義が大きいのとお話だった。コメンテーターの定行まり子、牛山美緒、寺尾信子の各氏からも貴重な体験報告があり有意義な交流になったと思う。

参加者は34名(内11名が非会員)非会員と男性の参加がいつもより多かった。

次回、第16回海外交流の会は7月11日(土)、「チャーミングな建築」と題して環境デザイナーの渡和由さんにお話を伺う予定である。渡さんは現在カリフォルニアに在住で、アメリカでのエコロジカルデザインを紹介してくださる予定。午後2時から、場所は大会の会場となる国立オリンピック記念青少年総合センターの国際交流館2階。大会に向けて最後の勉強会となるので是非多くの方に参加してもらいたいと思う。

(東由美子)



高橋元先生とコメンテータ



会場からの質問

■UIFA'98 記者発表会

6月13日(土)UIFA JAPON 1998年度第6回総会開催に先立ち、同会場で日本大会準備進捗状況及び、横浜における市民公園シンポジウム概要について記者発表会が行われた。

日刊建設工業新聞社、日刊建設通信新聞社、日刊建設産業新聞社、建築ジャーナルの4社が出席。関連記事が6月14・16日にかけて3紙に掲載、建築ジャーナルは9月号「直言」に掲載予定。

■広報日より

7月 いよいよ暑い夏の到来。9月の日本大会に寄せられた世界各地からの予想を超える参加申込み。今や準備たけなわの実行委員会の活動ぶり。

渋柿を甘柿にする接ぎ木の役目がUIFAの使命と期待を寄せられる尾島日本建築学会会長。そして数多くの新会員からUIFAに寄せる熱いメッセージ。

本合号から、この熱気をお伝えできれば幸いです。

担当：飯島、川嶋、渡辺、大高、田中、今村